

三十七回展受賞者の声

絵画の部



文部科学大臣賞

神内 颯(福井)
「越前の海V」
(油彩)

平成十九年初めて新日美展に出品して以来、毎年越前の海を描いてきました。越前海岸は切り立った岩と打ち寄せる荒波で名高い観光地でもある。私は何と言っても夏の海が好きだ、はるか寄せ来る波、岩を呑み込んで流れ落ちる波、飛び散る水飛沫、そこには千変万化の色彩と香り来る潮の気があります。

私は事ある毎にここを訪れる。そしてイーゼルを立てて制作に取り組んできた。近代絵画の父と言われたセザンヌは、ルイ・オランジュにあてた手紙の中で「自然に対するサンシオンが芸術についてのあらゆる概念の基礎であり、しかもそれは非常に長い間に亘る経験に於いてしか獲得できない」と言っている。

自然への美的感動はそれを繰り返すだけでなく自分の感情と情動を揺り動かす自らの感性を磨くことに他ならない、具体的には自然から受ける感動を自身の内面に吸収咀嚼し、構成し、表現する、そのためには十分な体験、すなわち作品制作の積み重ねしかないと考えている。強いサンシオンはこうして生まれ、磨かれると思う。

中野中先生からも頂いた講評に「旅に出て感動する風景に出合うことはよくあること、この感動を絵にすることは可能だが作品にはならない。身近な風景である越前の海を描いた力強い内面表現が素晴らしいとの過分の講評を頂き恐縮しています。又私の気持ちの確に指摘頂いた事、大変うれしく感謝しております。

この度は「文部科学大臣賞」という大きな賞を頂き大変うれしく、又名誉に思っています。審査員始め新日美の委員・諸先生方にお礼申し上げます。又福井県在住であり乍ら所属させて頂いている京都支部の皆様温かい激励ご好意に感謝しております。まだまだ浅学未熟の私ですが、

これからの新日美の発展に貢献できるように努力してまいります、今後ともよろしくお願ひします。



東京都知事賞

飯村君江(京都)
「変容—断章」
(コラージュ)

新日美の京都支部事務局を担当して二十余年、今年も第三十七回展の審査の報告を受けて、おめでとうのメールに一瞬驚きました。京都支部から文部科学大臣賞に輝かれた神内さん、そして京都知事賞が私、との報告に、びっくり。そして嬉しさがこみ上げてきました。

自分自身年齢も節目ですし、オリンピック招致の猪瀬知事の賞状が頂けること、大いに励みにもなりますし、私を支えて下さっている廻りの方々に感謝です。

今回の作品は、今まで以上に墨の濃淡、かすれ、にじみなどを生かして、よりモダンな感覚のイメージで制作しました。シャープな線を使うことで、和紙のコラージュならではの表現は出来たように思います。題名は余談になりますが、一九八四の吹奏楽コンクールの課題曲、池上敏作曲の「変容—断章」から付けさせていただきました。打楽器の力強さではじまるとても動きが早い曲です。

受賞式の講評で中野中先生から絵の中にどれだけ自己表現が出来るかというお話を聞き、自分なりに私自身の人間力を高めていくことが第一だと痛感しました。
終りになりましたが、ここまで育てて頂いた新日美で活動できますこと本当に幸せに思っています。これからも会が益々発展していきますよう願ってやみません。本当にありがとうございます。



東京都議会議長賞

清水 泉州(島根)
「松 韻」
(水墨)

この度は新日美大賞という大きな賞を頂き本当に有難うございます。賞の重みを思いながらも描きます。100号で描くのは二度目、一回目は描き始めの遅かった事もありアクリルで描いた。今回は最初から油彩で決めていた。静物にするか風景にするか迷っていた時、暫くぶりで兄弟が集うことになり、六月に山形に行くことになった。風景は山々のあるものと思っていた事もあり、田舎の風景と決めた。
今まで写真の元に絵を描いた事は殆どない。写真で描いた絵と現場で描いた絵とは何処か違う気が私はする。今まで30号までは現場で



新日美大賞
色 摩光雄(東京)
「里 山」
(油彩)

これからも皆様方のご指導が頂けます様お願い申し上げます。有難うございました。

一九八六年第一〇回公募展に師の薦めで初出品し新人賞を受賞しました。以来二十七年目、今回の東京都議会議長賞を受賞し大変感激しております。

振り返ってみますと洋画、水墨画の画法・技法の違う中で描き続けることに大変迷い、悩みました。ある時期、師と共に会を出ることをすすめました。私一人残りました。中尾会長は私に「黒の色は強く美しい。どんな色にも勝る素晴らしさを持っている。」と話されました。この言葉は常に私の頭に在ります。

絵を描くということは自分の思いや感動をどう人に伝えるか、如何に豊かに表現するかの技法・画法にかかわる問題ではないことに気づかせて頂きました。今回の受賞は正に会長さんのおかげです。又、今回諸先生方にご批評頂いた事に厚くお礼申し上げます。表彰式での中野先生の講評で「自分の感動を生かした表現」の大切さを話されましたが、この言葉を今後の絵画活動の指針とし、精進に努めたいと思えます。



新人賞
石村空也(埼玉)
「古里の秋」
(油彩)

描いてきた。今回は100号なので、あらかじめ100号で2ヶ所の風景を描いてきた。100号のキャンバスを前に2枚の下絵を見たとき「構図はすごく大事だ、構図が悪いと絵にならない」と改めて思う。今回の絵の方が構図的にいいと思いついた。下絵を描いた時の臨場感が残っているうちにと思い、絵具を絞り出し一気に描き上げた。
勿論これで終わりではない。あとどこをどうすれば自分の絵になるか、足したり引いたり・・・何時もそうだがこれで完璧と思つて出品したことはない。最終的には私はこんなものだろうと思うところまで出品してきた。これからも大好きな絵を難しく考えず私は私の絵以外は描けないので、「いや描いているうちに変わる」とも有るかも。それも私だろうから楽しみにして・・・今回の賞を糧にこれからも楽しく描ければと思つている。

新人賞を受賞して
古希の年に「新人賞」を受賞し、大変光栄に存じます。ありがとうございます。
公募展に出展するのは、まったく初めてのことで、入選できるか、心配していたほどです。それだけに喜びもひとしおです。

私の名前は、石村空也(クウヤ)と申します。僧侶みたいな名前ですが、市井の人です。私は俳句を多少嗜みます。句会の主宰に「空也」の俳号をいただきました。気に入っているので、普段にも使っています。

さて、私が油彩を始めたのは、女房が他界した4年前のことです。当時、私は引籠り状態でした。それを見かねた親友が、私を画材屋まで連れて行き、油彩道具一式を購入したのが切掛けでした。油彩を観るのは好きでしたが、自分が油彩を描くことになろうとは、思ってもみませんでした。
風景画を描いて、雲に影があることすら、知らず、親友には、よく笑われました。
その後、親友の先生に3年間にわたり、ご指導を